第４回「高知県における知的障害特別支援学校の在り方に関する検討委員会」協議の概要

１日　時　令和元年１２月２日（月）１８：３０～２０：３０
２場　所　高知県立県民文化ホール第１１多目的室
３出席者　委員１０名中９名出席（竹内委員　欠席）
４議事
（１）　開会
　日程説明、資料確認等
（２）　議題
　①　第３回検討委員会での確認事項
　　特に意見なし
　②　「高知県における知的障害特別支援学校の在り方について」（意見のまとめ）について

（会長）資料は事前に委員あてに送っている。事前に目を通しているという前提で、９ページ、１０ページにある提言の部分を確認する。
【設置場所について】
（全委員）異議なし
【設置学部について】
（委員）インクルーシブ教育システムの理念について考えると、中学部、高等部の段階では、インクルーシブよりも、専門性の方にシフトしていくのではないか。段階によって捉え方を変えていってもいいのではないか。
（委員）他学部の設置については、時間がかかっても検討するということを盛り込んでほしい。
（会長）インクルーシブ教育については、資料の３、４ページに示している。インクルーシブ教育＝すべて通常の学級での対応ということではないということを確認。
文末を「今後も検討していくことが望ましい」と修正。
【通学について】
（委員）通学困難者がいる場合、寄宿舎の設置もありうるという確認だった。寄宿舎の設置についても記載してほしい。
（他の委員）同意見
（会長）文末を「通学困難者を出さないように寄宿舎設置も含めた対応策を検討すること」と修正。
【人数の規模】
（全委員）異議なし
【整備期間について】
（委員）スピード感をもった対応という表現で、できるだけ早くという事は書かれているが、もっといい表現はないか。期限を区切る訳にはいかないとは思うが、できるだけ早く設置するというような言葉にしてほしい。
（委員）時間軸も概念として入れたらどうか。

（委員）時間をあえて区切れないから書いていないと思うが、新築を作るのと変わらないくらい時間がかかっては意味がないので、書き方の工夫を。
（委員）山田特支は全ての教室を使って大変な状態。できるだけ早くしてほしい。
（会長）時間軸の表記は難しいと思うが、検討した中では例えば３年とか、５年とかを短期目標としてイメージしてきた。年限を書けるかどうか、事務局としてはどうか。
（教育長）５年では遅い。気持ち的には２年、３年と書き、対応をしたい。しかし、個々の状況があるので書きづらい。目安としてはそれくらいでやらないといけない。
（会長）教育長としては２年、３年というスピード感ということだった。
（教育長）遅くても３年くらい。喫緊の課題として取り組むという話なので、スピード感を持ってやっていかなければならない。
（会長）期間を書けると共通認識を持ちやすいが、場所にもよるので数字を入れるのは難しい。「スピード感をもったできるだけ早い対応」という表現で、より急いでくださいという意味にするのはどうか。数字に関しては、期間を明記することが望ましいが、事務局に任せるという形でよいか。
「スピード感をもったできるだけ早い対応」と修正する。
【校区について】
（委員）高知市の住民が通える学校と、その他の地域の住民が通える学校に違いがあり、選ぶことができない校区がある。人数のバランスについても考慮は必要だが、学校によって少し学習の内容が違うこともあり、色々なことを考慮してもらいたい。
（会長）ここでの校区は高知市の住民を対象にしたもの。しかし、保護者の立場からは各学校の教育の質を高めていってほしいという意見でよいか。
（委員）市立は高知市の方しか選ぶことができない。高知市の方は山田も日高も選ぶことができる。高知市から西、東に外れた方は、高知特別支援学校を選べない現実があり、そこが解消できたらということを考えている。
（会長）現実的に高知市の方は日高、山田、市立を選べるが、その他の方は選べない。この件は、その他のところに「学校選択、校区の見直しについて、今後協議する場があるとよいという意見が出された。」と入れるかどうか。
（委員）ご意見を否定することではないが、高知特支のことになるので、ここに載るのは違和感がある。意見があることは受け止めた。
（会長）原案通りとし、委員間で意見を共有するがまとめには記載しない。
【今後の特別支援学校に期待したい機能や役割について】
（委員）３つ目の、「卒業後の支援」だと広範囲なので、「卒業後の就労や生活の支援」ともう少し具体的なことを入れてほしい。
（会長）「卒業後の就労や生活の支援」と修正する。
【その他】
（委員）最後の◎について、山田特別支援学校は迷路化していて、すっきりした形で建築ができないかという気がする。いくつもの学校が一斉に古くなることが考えられるので、最後の一文に記載されていることはぜひお願いしたい。

（会長）ここでも特に記載はしないが、老朽化の状況も見ながら、どこかですっきりした形、建物について考えてもらいたいという意見が出た。
最後にオブザーバーとして、それぞれの校長からご意見を。
（オブザーバー）今回の検討の中核校の校長として感謝申し上げる。学校は少し窮屈ではあるが、教職員一丸となって教育の質を落とさないように頑張っている。少し前に、ノルウェーから４名ほどの視察があった。ノルウェーは法令上特別支援学校がない。視察後に感想を２点聞いた。一つ目は、ノルウェーにはない教育システムで新鮮だったということ。二つめは、障害の軽いお子さんと重いお子さんが一緒に学んでいるので、すでにインクルージョンされていると感じたということだった。個人的にはフルインクルージョンがいい対応とは思っていない。特別支援学校は比較的障害が重い支援度が高いお子さんのために一番専門性がある学校として存続し続けるべきだと思っている。今回のまとめの中にインクルーシブ教育システムについてたくさん出てくる。これは、障害者の権利に関する条約に基づくもので、これについてはやっていかなくてはならない。県議会でも確実に推進していくことが方向性として示されている。来年度は「２０２０高知総文」がある、東京にオリンピック・パラリンピックもやってくる。障害のある方の理解啓発がますます進んでいくだろう。共生社会の形成、ダイバーシティ、教育ではインクルーシブ教育となっている。キーワードは、地域や市町村教育委員会、特別支援学級の専門性。これからの将来を見据え、私たち一人一人が社会づくりに努力していく必要がある。このためには心掛けだけではなく、理念や施策が必要。この点は、行政が推進役となって進めてほしい。この点からも今回の検討会の意義は非常に重いものがあったということで感謝申し上げる。また、この検討委員会のまとめを踏まえた今後の教育委員会の計画が、本県のインクルーシブ教育の在り方を問う試金石になる。どうか今後長期的な展望をもった対応をしていただきたい。
（オブザーバー）検討委員の皆さま方、非常に熱心にご検討いただきありがとうございます。日高も、いつ児童生徒数が増えてくるかわからない状況。義務教育段階の子どもたちの入学希望が増えてきている。高知県のインクルーシブ教育をどう考えていくのかが非常に大事。教育支援委員会のなかで、２２条の３に基づき、障害の程度、保護者の思い等しっかり受け止めながら就学の決定をしていると思う。特別支援学級から指導方法について相談があるが、県の施策として特別支援学級等サポート事業で対応している。困っている地域の先生方に子どもたちの状況を聞き、サポートをさせていただいている。ただ、サポートの中で、小中学校の特別支援学級の先生がどれだけ長く関わってくれるのかということが課題と感じている。毎年同じ学校にサポートに行くが毎年先生が変わっているということもある。小中学校の中での専門性の継承も必要ではないか。そのようなことも踏まえて特別支援学校としてもサポートし、地域で暮らす障害のある子どもたちの教育の充実を図っていけたらと思う。卒業後の就労や生活の支援については、どこの特別支援学校もしっかりやっている。進路先から何年アフターケアをしてくれるかと聞かれるが、無期限延長保証と答えている。夏に１７年前の卒業生のところから連絡がありすぐに対応した。センター的機能については今も行っているということを理解してほしい。特別支援教育課から国にも特別支援学級の定数の見直しについて上程していると聞いている。県も何もしていないわけではなく、学級のこともしっかり考えて取り組んでいることを

伝えておきたい。

（オブザーバー）本校単独の課題としても、児童生徒数の増加に苦心してきた。特別支援学校に在籍する児童生徒の増加という課題は、特別支援学校における教育の充実という課題と、かたや、インクルーシブ教育の推進、具体的には地域の小中学校における特別支援学級をはじめとする教育の充実、あるいは、市町村教育委員会における就学時あるいは移行期における就学相談、教育支援の諸課題とも関連する。この２つの大きな課題の間に、特別支援学校在籍の児童生徒数の増加という課題を位置づけることができるのではないか。今回、議論を聞き、その思いを新たにした。特別支援学校としては、引き続き、知的障害教育において大事にしなければならないこと、教育内容や教育方法を追求する。センター的機能はもちろん、知的障害特別支援学校として大事にしなければならない教育に引き続き注力する。

（会長）最後に委員から一言ずつ意見をいただきたい。

（委員）日ごろから学校は何かあると叩かれている。教育委員会も考えているだろうが、一番の問題は、教員が少ないとか、教員の過重労働とか、どうにもならない状態もあるのではないか。不登校担当の教員を任命しても、それが併任だとまた仕事が増えているのかもしれない。そのような中で、この検討委員会で、いろんな方々の意見が聞けて良かった。事務局が毎回まとめてくれたので、頭が整理できて私としてはいい意見のまとめができたと思う。１０ページの「今後の特別支援学校に期待したい機能や役割」の部分が大事と思っている。センター的機能の充実は、自身の学校のレベルを上げることと、学校のレベルを上げたことを他の学校への支援につなげるということ。卒業後の支援はものすごく大変で、その人が生活する場、就労する場をできるだけ広げてほしい。農福連携なども小規模のところにも増やしていけたらいいのではないか。いい教育を受けられれば卒業後もあまり問題ない生活ができるのではないか。将来的には、その人が生産に関わるとか、家族がいろいろな問題から解き放たれて、両親も仕事ができるとか、そのようなところに学校の力がものすごく関わってくるのではないか。カウンセリング機能、保護者支援機能が記載されたこともいい。学校を卒業したらなかなか厳しいという意見の保護者もいる。学校がいかに優しい場所であるかというのは、学校にいる間は分からないので、いろいろなことも言われるかもしれないが、これもしっかりやってほしい。

（委員）カウンセリング機能は、学校の方がやるということを今後の期待として書かれていると思うが、できれば保護者間の連携を学校の方でやってほしい。本当はＰＴＡでやりたいところだが、つながりを持ってくれない保護者もいるので、そのあたりの支援も今後の学校の形として持ってほしい。他県の規模の大きな学校で、先生方が工夫を凝らした授業を行っており、生徒さんたちの元気な姿を見た。県内ではそれと比べて厳しいインフラのなかで先生方もものすごく工夫した授業をやってくれているが、大規模の学校を中長期的に設けていくこともぜひこの会の成果として申し送ってほしい。

（委員）共生社会の実現には相互理解が必要。知らないと歩み寄れないし、歩み寄ってくれた時に受け入れる準備もできない。１０ページの「その他」の一番上の理解啓発については、高知県小中学校ＰＴＡ連合会でもこのような現状もあるということを広めさせていただきながら、相互理解について一緒に何ができるかということを考えていく必要性を感じた。今子どもたちを取り巻く環境はすごいスピードで変わっていく。それに対応していく中で、それぞれの立場

で何ができるのかを考えなければいけない。自分も地域の一員として自分個人でも何ができるのか考えるきっかけをいただいた。

（委員）障害という部分では多様な対応が必要な状況がある。子どもさんや保護者が多様な状況に対して選択できる環境を今後も検討していただきたい。第３回で、保護者の声を聞いて、自分自身現場を見ることができていなかったのではないかと感じた。視察等も積極的にさせてもらえたらと思った。今回の課題は全国的にもあると聞いているので先進的に取り組んでいるところからいい所を取り入れて、子ども、保護者、現場で働く職員の方が暖かい気持ちになれる環境作りをお願いしたい。卒業後の受け入れ側である福祉事業所としては、学校で学んだスキルを活かせるような福祉事業所を目指したい。せっかく学んだことが活かされるように、ぜひ情報交換の場を設けて連携したい。

（委員）今回の検討委員会で、課題の早期解消の方針を具体的に示せてよかった。今回の問題を考えてみたときに、医療の進歩や社会の理解の広がりを受けて対象の子どもさんが増加しているというのはあると思うが、現在の特別支援学校には軽度から重度までの障害の程度の方が通っている。学校内でのインクルーシブ教育という話があったが、これを逆に言うと、軽度の子どもも特別支援学校を選ぶという傾向があるのではないか。特別支援学級の支援体制にも課題があるのではないか。特別支援学級における専門性を高めていくこと、人員体制を含めた体制の強化の必要性を地教委として感じた。特別支援学校におけるセンター的機能の強化ということをしっかりと行ってもらい、特別支援学校に行かなくても地域の学校でしっかりと成長できる体制を整える必要性を感じた。

（委員）子どもたちにとって充実した環境を整えることがベストだとは思うが、スピード感をもって今の子どもへ対応しなければならないということで難しさを感じた。小中学校の特別支援教育の充実のためには、特別支援学校の存在が非常に重要だし、その果たす役割も改めて感じた。市町村教育委員会としても小中学校の今後の取組の在り方を真剣に検討していかなくてはならない。施設の老朽化は進んでいくので、課題が出てから対応するのでは遅い。短いスパンで見直ししていくことが、子どもたちに迷惑をかけないことにつながると、改めて思った。

（委員）過去山田養護学校で研修会が毎年あり、その時に、考えが変わるできごとがあった。それは、寄宿舎の視察時に山田養護学校の先生が「子どもたちは人に好かれる人にならないといけない、歯磨き、身支度、お風呂等、全てのことが他人と接するときにとても大事なことになる」と話されたこと。子どもたちが将来幸せに生きていくことを考えて、取り組んでいかなくてはならないということだった。子どもたちを支援していく時、現状だけでなく大人になった時にどんな人になってほしいのかということを思いながら支援をしていくことが大事である。保護者と話す時も同じ。社会は変化していくので、この子どもたちが何十年か先に幸せになるにはどうすればいいか、ということを考えてやってきた。４０～５０人規模の実践はまた違った特徴があるはず。そこを学校の大きな特色にしながら発展していくことを楽しみにしている。今後も関心を寄せていきたい。

（副会長）今回特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会の代表として参加し、様々な立場の方の考えを知ることができた。現在の特別支援学校の状況、課題、今後の方向性を、委員やオブザーバーの皆さまとともに、考えることができた。今何を優先してやっていかなくてはいけ

ないかということ、わずか４回ではあるが、深いところまで考え学ぶことができた。特別支援学校に通う子どもたちのニーズ、保護者のニーズ、学校をつくる会のニーズを聞くことができた。そのようなことも含めて考えていくことが必要だと感じた。様々な案も出されたが一日も早い動きが必要であるということを改めて感じ、今回この検討委員会から提言を出すことができてよかった。２回目の時、新築がベストであるが、既存施設活用がベターでないかと発言した。私自身の結論としては、より早く対応できることをまず考えなければならない。伊藤教育長の２、３年以内というのは、すごく早いが、それぐらいの待てないものがあるのではないか。

（会長）資料２のＰ１５に４回の審議の経過がある。各市には施設についての情報提供もいただいたし、聞き取り調査もさせていただいた。特別支援学校にどのようなニーズがあるかという聞き取り調査もさせていただいた。その中で、第一回の時には、本当に学校を作るのか、全般的な見直しが必要なのではないか、インクルーシブ教育とはそもそも何なのかといった茫漠としたところから、可及的速やかに対応する必要があるだろうというように議論が収束していった。その中で、インクルーシブ教育の中での特別支援学校の意義ということを強調していただいたし、安全なところに絶対作ってほしい、障害がある子どもたちが、防災上問題となった所の施設を使うことがないようにという意見をいただいた。福祉との連携という点にも意見をいただいた。今後の期待ということで情報交換をしていきたいという意見もいただいた。診療の場から保護者や本人の気持ちや意見という視点で意見をいただき、推計にも意見をいただくことで共通認識を図らせてもらった。特別支援学級との連携ということでコメントもいただいた。１０ページの「今後の特別支援学校に期待したい機能や役割」については、新しく作る学校がどんな機能を持つのか、ということが期待されるような現実的な提案になったのではないか。

第３回には「学校をつくる会」の皆さんにもご意見をいただいた。小中学校の問題もあるが、連続性のある多様な学びの場ということを前提としつつ、どんな学校を作っていくのかということが議論された。高知県におけるインクルーシブ教育とは何なのか、インクルーシブ時代に新しい知的障害特別支援学校を作る意味は何なのかということを具体的にしていただきたい。それが１０ページにある「今後の特別支援学校に期待される役割や機能」なのではないか。今後の過程は皆が注視しているので、新しい学校がそれぞれの子どもにとって適切な支援指導の場として作られることを期待している。

文言に関しては、いくつか加筆修正が必要なので、事務局と修正して教育長に渡す。その作業はまかせていただいてもよろしいか。

（全委員）異議なし

（会長）全４回の議論の中で、可及的速やかに対応することということで、具体的な現実的な案になった。今後も議論は続けてほしいという思いを、今後の高知県のインクルーシブ教育の課題として引き取っていただきたい。